
Fedel Eye's

藤山 博

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F e d e l E y e ' s

【Nコード】

N 6 1 1 8 Q

【作者名】

藤山 博

【あらすじ】

とある大事件の後、世界『レイス・フェデル』は、神と呼ばれる存在の名の下に全て管理されてこととなった。全生物は、常に『観察屋』と呼ばれる存在に観られ、評価され、評価内容によって人生が激化する。

『観察屋』によって、世界は変化していく。

『観察屋』に観られ評価される事に不満を感じる生物が増加してい

た。

『観察屋』もまた――。

均衡が保たれるわけもない不条理な世界に、再び事件が起き始めていく――。

そんな中、『観察屋』の少年ハル・ジオンをはじめ、その仲間達が世界を元に戻すために、今、立ち上がる――。

第一話 観察屋

「今日も良い天気だなあ——」
かるいやま

軽井山の頂上で背伸びをしている少年が発した。

丈はわずか150cm程度で小柄、到底縛れない程の短髪、頭には「V」と書かれた帽子。

腰には複数のアクセサリー、右眼には黒い眼帯。

わりと動きやすそうな服装の少年は、軽井山の頂上に一人いた。

「空も青いなー、空気も悪くないし、今日は『巡察』の必要もないかな」

「……ってそんな事は言ってられないか」

少年は、すっと立ち上がり、空高く飛んで行った。いや、飛んだというよりも……、ただのジャンプ。

普通の人間では信じがたいほどの跳躍力。空を飛んだと錯覚するほどに。

そう、ボクの視界から、少年はすぐに姿を消した。と、少年のいた付近には落書きだらけの小屋、窓から顔を出している小さな弧狸こたぬきが、呟いていた。

——ここは下街。

軽井山から見下ろした位置にある小さな街。

この街は、一見広く見え人口も多く、活気のある街ではない。確かに建物が道並みに建ち、高層ビルも多い。

しかし、今は一年程の前ならば確かに人口も多く、活気があった街。しかし、疑わしい厳選なる抽選というものに当選してしまった当街は、激変した。

ある管理下に置かれたこの街は、まるで別物。決して草木は枯れ、砂漠のような姿になったわけではない。見た目は今も昔もそう変わ

りはない。違うのは……

「ん、何かやな匂いがするぞ」

下街をピョンピョンと跳び跳ねながら移動していた少年は、何かを感じた。

「あ！」

少年は叫んだ。少年が視たのは、刃物を持ったヤクザ風の男と細身の男だ。

刃物を持った男は、何かを話している様子。

「お前、何度言ったら分かるんだ？」

彼は、刃物を突きつけながら話す。細身の男は、刃物を前に言葉が出ない。

ただ、涙を流しながら……。

「ごめんなさい、ごめんなさい」

言わんばかり頭を下げ続けている。いきなり刃物を叩きつけられたのであれば、当然驚くであろう。しかし、ただそれだけの事で、ここまでビビッてしまうものなのだろうか……？

彼は、何も話さない態度にうんざりした様子。そして、ズボンの左ポケットから何かを取り出した。

彼が取り出したのは腕時計。彼は、腕時計についている小型のボタンを押すと、小さい液晶画面が浮かび上がってくる。液晶画面には、『50』と数字が表示されている。

「へー、50点か」

彼がそう言うと同時に、どこからか声が轟く。

「はい、ストップ！」

——上空、彼の頭上から一人の少年が降りてきた。右眼に黒い眼帯を付けた少年だ。

「なんだ、ガキか。ガキはとっと家にかえんな！」

彼は、突然頭上から降ってきた事には驚いた様子だが、少年の姿

を見て大きな溜め息をついていた。

そして、少年を罵倒する。少年が頭上から降ってきた不可思議な事実については、すでに頭にはない様子。見た目がガキな時点で、彼は調子に乗っている様子。当然といえば当然なのか。

しかし、「見た目で判断するのはよくない。」という言葉は、今の彼に一番合うだろう。

「もう大丈夫だから、早く逃げて」

彼の言葉を全く聞いていなかったのように、少年は細身の男に逃げるよう話しかけていた。

細身の男は、慌ててその場から立ち去る。それを見た彼は、怒号する。

「おい！ 誰が帰っていいと言ったんだ？ ああー？」

「もういいよおっさん、あなたの相手はここにいるから」
が、すぐ様少年が切り返す。

「あんたさあ、カツアゲが知らんけどよく出来るよな。

『観察計』を拾って調子に乗っちゃった系？

まあ、それ拾ったら調子の乗りたくなる理由を分かるけどよ。

どうせなら、『巡察』していない時にやれよな」

少年は、黒い眼帯を外し、奥にある澄んだ『緑の眼』で彼を『観る』。

「『制裁』の時間だ！」

彼は、右手に持っていた刃物をギュツと握りしめ、少年に襲いかかる。

殺意。少年だろうと容赦はしない。殺らなければヤバイ。

少年に観られた彼の表情から、そう分かる様子。

彼に対して少年は、銀色のアクセサリーを一つ取り出した。腰に身に付けていたものだ。

手に取ったアクセサリーは、小型。何の変哲もない棒状のような物。

「やっぱり、あんた前科ありか。しかも、35点。他の『観察屋』

にも裁かれている。

そして、今から『制裁』……、あんた終わりだな」

少年は、彼を観ながら話を続けた。

「前科ありのあんたならもう分かっているよな？」

「『観察屋』！」

彼が『観察屋』と口にする、少年はニヤリとする。

少年は、手にしたアクセサリをしまおうとした、その時。

「『観察屋』なんかにビビるわけねーだろお！　んの前に殺ってるっ！」

少年の言動に対して、彼は立ち止まっていた。

しかし、吹っ切れた様子で、再び少年に襲いかかる。

「第十八条！」

少年は声を張り上げた。さらに、続く。

「『制裁』に対して、観察屋への一切の抵抗を禁ず」

「あんたのルールに反する行為、第三級犯罪だぜ？」

「うるせえ——！」

そして、止まらぬ彼の刃物が突き刺さる……。

「なっ、ハア？」

刃物は少年ではなく、棒状のアクセサリ。

立てると僅か5cm程の小型。刃物の切っ先は、中心を捉える。

余程の自身がない限り、少年の様な防ぎ方は決してしないだろう。

止めた刃物を振り払う少年。反動により、彼は地面に倒れる。少年

は、アクセサリを右手で、サツサツと軽く払った後、腰に戻した。

両の瞳の色が異なる少年の右眼は、再び眼帯の中に姿を隠す。

「制裁完了！」

そして、『制裁』が完了したことを彼に告げ、立ち去ろうとした。

しかし、少年は振り返り口を開いた。

「あんたにはもう関係ないけど、一応、報告するか」

対象者：

・ 刃物の男（第三民）

裁状：

・ 民間人の脅し

・ 第三級犯罪

制裁：

・ ライフ - 10点

残りライフ、25点

—— 綺麗な星が一面に広がる。雲一つなく、赤月が高揚よく輝く、時は、夜。

星空の下にある小屋の中、少年と弧狸がいた。

弧狸は二足歩行をしており、少し変わっている。少年の方は、弧狸が作るご飯をたらい上げていた。

テーブルには、十を超えるお皿が積まれていて、ざっと十人前はある。

「ハル、もっと落ち着いて食べたらず」

弧狸が話す。二足歩行するだけでなく、言葉も。

『ハル』ジョン』、少年の名だ。

ハルは、仕事をした後は腹が減るのと言いたそうだが、ご飯を食べながらでは、言葉にはならず、弧狸タヌーには理解出来なかった。ご飯の片付けが終わり一段落した頃、タヌーはハルに話しかける。
「今日はどうだったの？」

満腹で寝転んでいたハルは起き上がり、答える。

「今日の『巡察』は、第三民が一人いたくらいだなあ。

点数も少なくて、今日でいなくなっちゃったけどね」

「第三民……、一般かあ。一年前は『50点』あるはずなのにね。

下街の事分かってなさすぎだよね」「いや、分かっててやっているんだと思うよ。『観察計』を持ってニヤついてたからね。んでもそんなに興味あるものなのかなあ、管理下の街を観察し、悪事を働く者には制裁を。『観察屋』ってかなり大変だけどなあ、んでもそれが楽しいから続けているんだけどね！」

少年ハル・ジオンと狐狸タヌー、二人は……、いや、一人と一匹は、『観察屋』。

『観察屋』は、とある大事件を発端として誕生した。

大事件の後、世界『レイス・フェデル』を区切り、1つ1つのエリアを『観察屋』に『観察』させることを始めた者がいた。即ち管理下に置くことで、全てを『観察』するように。

その者は、世界中の全てを『観る』事が出来る存在、世界『レイスフェデル』の神。『観察屋』が『観察』させることで、一切の悪事を許さないようにする。そのため、多数の『観察屋』も誕生させたのだ。

『観察屋』は、何かしらの悪事を観たとき、『観察計』を通じ、報告をすることで、全管理システム『マザー・フェデル』が管理する。

世界に存在する生物は、およそ第一民、第二民、第三民と分別されるが、基本的には、50点を割り振られている。

悪事の裁状により点数の増減はあるものの、与えられた点数が30点を下回ると、世界『レイス・フェデル』で生きる価値なしと判断されてしまう。

全てにおいて管理下のもとにある世界『レイス・フェデル』。

そして、『観察屋』として人生を歩む少年ハル・ジオンと狐狸タヌー。

ちよつと妖しいコンビは、明日もまた『巡察』をする日々を送っていく。

第二話 開幕

——下街、とある一室。

灯りがない暗闇の中、PCの前に座っている男がいる。

男は、ヘッドホンとマイクを付けており、話をしている様子。ネット通話だ。

「先日、追放処分となったやつがいる。

ライフが追放処分対象値になるとか、ぶっちゃけ考えられないな」

「そうね。今の時代、とても犯罪なんて出来ないわ。

もし、罪を犯すとしたら」

「うむ、『観察屋』のせいで、動きにくくなったものだ。

見つからなければ、罪に問われることもないが、それは今も昔も同じか」

会話をしているのは、ダンとアスカだ。

とある大事件後、『観察屋』と呼ばれる者を世界中に配置された。

『観察屋』は、世界を各エリアに分け、それぞれ担当のエリアを持ち、『観察』することを義務付けられる。選抜された『観察屋』は一切の拒否が出来なかったという。

中には拒否をした者もいるらしいが、その者はなぜか行方不明となったようだ。選抜はランダムにて行われたという噂だが、真相は明らかになっていない。

——なぜ、『観察屋』が配置されたのか。

犯罪が多い世の中、何とか平和に安全に暮らせる世界にならないのか……、追求した末、抑制するために、『観察屋』による『制裁』の制度が出来上がったようだ。

「アスカ、例の準備は進んでいるのか？」

「ええ、5人の有志たちが揃ったわ」

「そうか、ようやく行動に移す段階まで来たというわけだな。

有志を集めるにはそれほど時間かからなかったが、

『計画』に使用する物、その準備に手間取ってしまった」

「そうね、いよいよ始めるときが来たのね」

「ああ、『ダン・プロジェクト計画』開幕だ」

ダンとアスカの会話は終わる頃には、日付が変わっていた。
そして、下街はかつてない事件に覆われる。

「ちょっと！ ハルってば！」

「ん、んん？」

軽井山の頂上、ハルの小屋。タヌーがハルを叩き起こしていた。

「どうしたのさ……」

「巡察の時間っ！ 過ぎちゃうよ？」

「あっ！」

ハルは慌てて起き上がる。

『観察屋』は、毎日、巡察をする時間は決まっている。巡察をするのは、下街の一部なのだが、一人でも『観察屋』が巡察をしないと、一部のエリアだけ観察をしなくなるため、それは大問題である。もともと巡察をする時間も特定の時間帯のため、24時間下街全てを観察しているわけではないので、それはそれで問題と言わざるを得ない。が、ある程度のところで妥協しているのが現状だ。

「んー、今日はいいや。巡察なしで」

「ええ？」

「リカが巡察してくれたみたいだ」

ハルは、『観察計』を見ながら話す。

『観察計』……、相手を観察するために用いる『観察屋』の基本道具の一つ。だが、ハルは、右眼で観るだけで観察し相手のライフを知ることが出来る。

その為、観察をするために『観察計』は使用することはない。

『観察計』には別の使い道がある。それは、『観察屋』同士で通話が出来る機能だ。

特に、近隣エリアの『観察屋』と連絡を取り合うのに重宝する。ハルは、『観察屋』リカ「シャーロットからの留守電メモを聞いていた。」

留守電には、「どうせ寝てるんでしょ？ついでに観といたから！」と怒声の口調で残されていた。

今日の巡察はしなくてよかったハルは、再び、寝ようとした。しかし、その時。

「ハル、これ見て！」

タヌーはテレビを見て話す。

ハルも一緒にテレビを見る。

「なんだ、唯の自殺じゃないか」

「いや、これ見てよ」

テレビをよく見ると、事件が起きた現場には、腕時計が残されていた——『観察計』だ。家の中とかならば、『観察計』を置いておく事などあると思うが……、現場は、下街中央の公園。

『観察屋』に何かあったのは明らかだ。

報道によると、現場には、『観察計』しかなく、それ以外は何もなかったとのこと。犯人を捜す手がかりは一切なく、警察はすでに手詰まりだと報告しているという。

「『観察屋』を襲ったのかどうか分からないけど、必ず見つけて『制裁』するしかないな」

「そうだね。でも、手がかりがないみたいだけど、ハル、どうする？」

「手がかりはきつとあるさ、現場に」

ハルは、小屋を飛び出し、下街へと降りて行く。

『観察屋』が襲われる事件、それは突然始まった。

しかし、これは始まりに過ぎなかった。

ハルの大切な人がいなくなってしまうなんて、ハルはこの時、知

る由もなかった。

第三話 分析

——『観察屋』消失から一週間後。

現在も手がかりは何も掴めていなかった。警察も単なる自殺ではなく事件として扱うようになっていた。同じ被害が多発していたのだ。何れの現場には、『観察計』が置かれていた。

被害者は間違いなく『観察屋』である。

——下街、とある一室。電気もついていない暗闇、テレビの明かりだけが灯っていた。

テレビには『観察屋』消失事件のニュース、ダンが見ていた。

「グルルル……、全て順調だ。計画に何の問題もない。手がかりがない？ その通りだ！ 手がかりなど残していない、全て消しているのだから！」

ダンは笑う。計画通りに事が進んでいるからであろう、理由は他にもあるようだが。

ダンにネット電話の着信が入った。

「もしもし」

アスカだ。

「お前の作戦は最高だぜえ？」

「ふふ、当然よ？ 貴方のように『観察屋』でなければ出来ない方法だけど、絶対に足が残らないわ。

有志を使い、『観察屋』を襲わせ……、殺す、貴方が有志と『観察屋』を一緒に消す。

便利なものよね、ライフが一定値以下になれば管理システム『マザー・フェデル』が感知して、追放処分してくれるんだもの」

「『観察屋』まで消す事が出来るとは知らなかった。一般の第三民と違い、観察してもライフが観えないから不可能とばかり」

「ようはやり方ね。『観察屋』は観察側だから当然消せない。でも、第三民が触れている状態ならば、マザー・フェデルがまとめて追放してくれる。これが『観察屋』を消す唯一の手段であり最高の方法」
「はははっだな！ 下街にいる『観察屋』は、あと三人か。どうだ？ 順調なんだ、たまには飯でも」

「……、ごめん一旦切るわ」

ブツ、アス力は突然電話を切った。

「食えねえ女だ。利用するには最高な女だがな、さてと次の指令をヤツに送るか」

——ハルの小屋、タヌー研究用地下室。

ハルと一緒に住む弧狸のタヌー。彼は、動物なのに人間と同等かそれ以上頭脳を持っていた。

そんなタヌーに、小屋の地下に専用の研究室があった。

研究室の中、タヌーは『観察屋』消失事件についてのデータを出来る限り集め、分析をしていた。

分析を始めて約一週間程経ったが、未だ手がかりは掴めていない様子。頭を抱えていたタヌー。

ハルが地下に降りてきた。

「タヌー、そろそろ巡察の時間」

「巡察……っそうか！」

タヌーは、テーブルの上にある分析したデータを取り、見直した。そして、見つけたと言わんばかりの表情で口を開いた。

「ハルっ、これ見て！」

タヌーがハルに見せたのはデータの一部分、今まで発生した事件の時間の場所が記されていた。

タヌーは、データにカラーマジックペンで書き始めた。

数分後、タヌーは書き終えた。そして、ハルに説明する。

「今ボクが記したのは、各『観察屋』の巡察時間とルート。こう書

くと分かるんだけど」

下街の簡易地図の上に書かれた事件発生場所と時間、そして『観察屋』の巡察ルートと時間。そこから分かったのは……。

「事件は、『観察屋』の巡察時間外に起きている？」

ハルが言つと、タヌーは頷いた。

「『観察屋』の動向を知らないとならないよな、犯人は相当『観察屋』の事を知っている、それか『観察屋』自身の可能性が高そうだな」
「うん、そう思う。そして、事件がまだ起きてないC区。次はきつとここで犯行するはずだよ、狙いはC区担当の『観察屋』」

タヌーが話すと、ハルは階段を上がり、出かける準備をし始めた。タヌーの分析が正しいければ、次はきつとC区で起きるはずということとを信じての行動だろう。

下街はA～E区の5つに分けられていて、そのうち、A区、B区、D区ではすでに起きた。すると、まだ起きていないのはC区、E区ということになるが、タヌーの勘がC区と判断したのだろう。

ハルは、下街C区に向かった。

第四話 觀察

——下街の郊外。

人気のない、誰も知らない所で事は起きていた。

青年が一人倒れている。青年の顔は膨れ上がったうえに、あざだらけの体。青年を殴打による痛撃を与えたのは、青年を見下ろす黒ずくめの男。いや、違う。黒ずくめの男と並んでいるヤンキーだ。

どうやら顔見知りではない様子、ヤンキーは男を睨んでいた。

「おい！ さつきから何じつと見てんだ？ ああ？」

黒ずくめの男は、青年とヤンキーが争っていた所に来た様子。何も言わずただずつと観ていたため、我慢できなかったろう。

「まあ見られたからには生かしちやおけねえよなあ」

ヤンキーが黒ずくめの男の胸元を掴むと、ボソツと呟いた。

「消えろ」

黒ずくめの男が呟くと、ヤンキーは瞬く間に消えた。完全に。黒ずくめの男は、乱れた服を元に戻し、青年の方を向いた。腫れ上がり、光が小さい瞳の奥に、かすかに見た出来事。

青年は話すのすらきつそうな表情で、上半身を起こしながら、言う。

「『觀察屋』——俺と同じ？」

黒ずくめの男は、青年のお腹を右足で激しく踏む。一度ではなく何度も。青年の悲鳴は響き渡るが、誰も聞く人はいない。黒ずくめの男は、左手の裾をめくり、腕時計を青年に見せた——「觀察計」。

「何で」

青年は、黒ずくめの男に問う。が、黒ずくめの男は何も言わない。青年の言葉に右足は止めたが、青年はもがき苦しむ。

青年の姿を見て鼻で笑った黒ずくめの男は、口を開いた。

「お前もそろそろ消えろ！」

「『観察屋』は消せない。知らなかったのか？」

制裁によるライフの減点で、管理システム『マザー・フェデル』が追放処分とし、消したように見せたが、青年の言う通り、『観察屋』には、通用しない手段だった。

しかし、それは黒ずくめの男も分かっている様子。

「見せてやろう」

黒ずくめの男は、腰を落としてどっしりと構える。右拳を強く握り、力を溜め、大地は揺れ地響きが走る。

「『力』で消しに」

黒ずくめの男は、力を溜めた右拳を青年に向けようとした——その時、上空から一人の少年が降りてきた。

上空から舞い降りる少年、ハルだ。

「そこまでだ！」

ハルは、黒ずくめの男の背後に着地すると、即座に現状を把握する。倒れている青年、青年に向けて拳を出している黒ずくめの男。『敵』は黒ずくめの男だ——。

ハルが発した言葉に対して、青年はハルを見る。が、黒ずくめの男は反応しなかった。

「おい、聞いてんのかよ！」

先程よりも少し大きめの声量でハルが言う。が、それでも黒ずくめの男は振り返らない。

ハルは、黒ずくめの男を指差し、話す。

「お前がここ最近の一連の犯人って分かってんの！」

ハルが言うと、黒ずくめの男は振り返りハルを見た。

「貴方、何を言っているのでしょうか？」

私は、ただ彼が襲われていた所を助けただけですよ」

「はっ？　んなバレバレな嘘ついてんじゃねえよ！」

「いきなりやって来て、何ですか？　私を『観察屋』消失事件の犯人扱いするなんて」

「それならば彼に真実を聞いてみたらどうでしょう？」

ハルは、若干上半身を起こした青年の側に行き、尋ねる。

「酷い怪我だな、一体誰にやられたんだ？」

青年はちらつと黒ずくめの男を見た後、答える。

「ヤンキーが突然襲ってきて、危ない所を彼に助けてもらいました」

「そのヤンキーはどこに？」

「ヤンキーなら私が消しました」

黒ずくめの男がヤンキーを自ら消したことを告げる。

消す、——即ち、黒ずくめの男は『観察屋』であることをハルに名乗った。

第五話 力と眼

『観察屋』である事を明かした黒ずくめの男、ハルが来る前とは態度が一変した事は、青年には明らかであろう。

何故だろうか。ハル、黒ずくめの男、お互い初対面なのは間違いない。が、黒ずくめの男はハルの事を知っていたのだ。

黒ずくめの男だけではなく、青年も。

下街において、『観察屋』ハル・ジオンの事を知らない者は決して少なくなかったのだ。

ハルの功績についても、広く知れ渡っていたのだ。

そして、『あの存在』も。

「『観察屋』だと？」

ハルは、眼帯を外し『右眼』で観る。ハルの『右眼』は、『観察計』を使わずとも、相手のライフを観る事が出来る。

ライフとは、持ち点であり、一定値になると管理システム『マザー・フェデル』によって追放処分となってしまう。言わば、死と何ら変わらない。

ライフを減らす行為、『制裁』。出来るのは『観察屋』と呼ばれる者である。但し、『制裁』が出来るのはライフがわかる場合のみだ。

「ノーテンか」

「さすがは、ハル・ジオンさん。その『眼』、物凄く欲しますわ」

「『観察屋』である事は嘘ではないらしいな」

「当然です。そう言ったではありませんか。よもやハル・ジオンさんの前で嘘などつけません。」

「言ったでしょう？ 私はただ、青年を襲っていたヤンキーを制裁しただけと」

「そうか」

黒ずくめの男は、少なからず『観察屋』であるという事実。紛れもない真実。

『観察屋』が『観察屋』を襲うわけもないという期待と信頼。これ以上問いだしても何も変わらないと悟ったのか、ハルは首を縦に振り、分かった、頷いた。

黒ずくめの男は、疑いが晴れたからなのか、青年に肩を貸してあげ、最寄りの病院へと連れにその場から離れて行った。

後ろ姿が点のように小さくなった頃、ハルは、そっと『右眼』を瞑り、そして開いた。

「やはり」

何か分かったような素振りで、ハルは、軽井山に向かって行く。

——時間は過ぎ、夕刻。

ハルが小屋に戻ると、弧狸タヌーが帰りを待ちわびていた。

早く来て、と言わんばかりの慌てようで、小さな手で手招きをし、ハルを地下室へ呼んだ。

ハルが地下室へ行くと、タヌーは、ニヤリと微笑んだ。

「やはり、ビンゴ？」

「うん、間違いない。犯人は、黒ずくめの男だよ」

タヌーは、黒ずくめの男の存在をすでに知っていた。
何故か。

答えは、ハルの『右眼』にある。

ハルの『右眼』は特殊な力を宿している、力——『異能』。

『異能』は、特殊能力として扱われる力の一種で、神と呼ばれる存在が、『観察屋』に授けたものである。決して全ての『観察屋』に『異能』があるわけではない、ごく一部だ。

『異能』を持つ一部の『観察屋』は、例外なく、体の一部分が進化しているのだ。

ハルで例えるならば、『右眼』、がそれに当たる。

『異能を持つ眼』、世間では、『F e d e l E y e』《フェデル・アイ》と呼ばれている――。

ハルの持つ『異能』の一つとして、ハルが見たものを任意でタヌーに見せることが出来る力がある。

ハルが見せようと思わなければ、タヌーには見えない。見せたい時に見せることが出来る。

ハルと黒ずくめの男の会話を見たときから、タヌーは、黒ずくめの男について調べ上げていたのだ。

時間に見てみると、小一時間程度なのだが、タヌーならばそれだけの時間があれば十分だった。

もちろん、ハルが黒ずくめの男の所に着くまでの間、事件の発生した現場に、何か手がかり探すべく立ち寄った事が裏付けにもなっていた。

何か事件が起きた場所には、何か異臭が残っているという。

ハルは匂いを感じ取る事が出来る。

これは、『異能』ではない。ハルが少し変わっている人種だからだろうか。

何かどこかで事件が起きている時も、『やな匂い』として感じ取る事もハルには可能だ。

黒ずくめの男と遭遇した郊外。下街のC区からは、若干、離れていた。

それでもハルがそこに辿り着くことが出来たのは、匂いを感じ取ることが出来たからであらう。

タヌーから告げられ、ハルも確信した。『観察屋』消失事件の犯人は、黒ずくめの男と。

事件の発生した現場には全て同じ匂いが。匂いは、黒ずくめの男からも感じ取れたこと。

2つの大きな事柄が、黒ずくめの男を犯人である事に、二人は辿り着く事が出来た。

「よし、そうと決まったら『制裁』しに行ってくるか」

「待つて、ハル。出かけるなら明日にした方がいいよ。今日は『異能』を使いすぎてる」

「そっだな、今日ゆっくり休んで、明日行ってくる」

——翌日、ハルは朝早くから小屋を飛び出した。

第六話 キッス？

——少し刻を遡る。夕刻——下街の病院の待合室。

黒ずくめの男は青年を病院に連れていき、治療を終えた頃。

「何故、消さなかった？」

青年は、黒ずくめの男に問う。ハルが来たことで消すのを止めた黒ずくめの男。今ならば消そうと思えば何時でも出来るはずなのに、逆に助けてもらった青年。

つい先程まで消されようとしていたとは考えにくい——態度に、どうしても聞きたくなったのであるう。

「勘違いするんじゃないぞ？先程とは状況が違うのだ。もうお前など消す価値もない」

「状況が違う？」

「分からぬか？ハル＝ジオンの存在がどれほどの影響をもたらすのか」

「疑いは晴れていた風だったじゃないか」

「ハッ、これだから能無しは。十中八九、ヤツは疑っているだろう。『観察屋』消失事件の犯人として、だ」

「やはり」

「とにかく、もう用は無い。だが、これだけは忘れるなよ？ 何時でも消せるという事を」

いつの間にか、午後の診察の時間は終えたのか、待合室には二人だけとなっていた。

黒ずくめの男は去り、青年も続いて病院を後にした。

——其の夜。

青年は病院の後、タクシーを拾い、自宅に帰り、何となくテレビ

をつけていた。特に見ているような様子ではなく、別の事に意識がいつているようだ。

黒ずくめの男の事だろうか、それとも……。

青年はソファから立ち上がり、台所へ飲料水を取りに行く。青年の家は、1LDKのようだ。

青年は飲料水を持った所で、時計のアラームが鳴った。青年は時計を見て、19時になった事を知る。

「そろそろかな」

青年がそう呟くと、インターホンが鳴った。

青年は、玄関に行き、ドア越しに誰が来たのか確認しようとする。「キッスー！ 早く開けてよー」

確認するまでもなかった。彼女の名は、アス力。青年キッスの女友達である。

知り合ってまだ半年程度。アス力は『観察屋』に強く関心がある。女でありながらキッスの相棒として、『観察屋』の仕事を手伝っていた。そんなアス力が夜キッスの元にやってきたのは、昼間の件で怪我を負ったと聞き、慌てて飛んできたという。

もちろん、話したのはキッスだ。

「別にこなくなたっていいって言ったのに」

「素直じゃないわねえ、ほら、座って座って」

アス力に背中を押されてソファまで連れていかれるキッスは、そのまま座った。

「ねえキッス、昼間何があったの？」

アス力が尋ねると、キッスは昼間の出来事を全て話した。

ヤンキーの事、黒ずくめの男の事、そして、ハルジオンに会った事。

「その黒ずくめの男っての許せないね！ あたしがぶっ飛ばしてくる！」

「わー待って待って！ ホント危険だから……、ね？」

「何言ってるの？ キッスがガツンと行かないからじゃない！」

「いや、アス力はガツンと行き過ぎそうだから」

「何ですって！」

「あっ」

キッスは、いつものアレが来ると悟り、両腕で身を固める。アスカのグーパンチを防ぐためだ。

「バカね」

アス力はキッスの頭をポンッと叩く。キッスは腕を元に戻し、アスカを見る。

「また怪我されても困るしね」

アス力はクスツと笑い、キッスも一緒になって笑った。

そして、一日が終わり、今日もまた次の朝を迎える。

朝が来て、夜が来て、一日が終わり、朝を迎える。

いつまで続くのだろうか。きっと死を迎える。その日まで――。

――翌朝。

キッスが目覚めるとテーブルの上に『キッスへ』と書かれた手紙が置いてあることに気づく。

手紙には一言、ごめんね、ありがとうとだけ書かれていた――。

第七話 キッス？

キッスの部屋に残された一枚の手紙は、アスカが書いたもので間違いないだろう。

キッスの頭の中は、白い雪のように真っ白となり、困惑を隠せずにはいられない様子だった。

実はまだ家の中にいるのではないか、と薄い期待感が僅かにあると思ったのか、目を覚ました自室を出る。

キッスは、キッチン、トイレなどを見试着みるが、アスカの姿はない。

残るは、お約束の風呂場。目の前まで行き、唾を飲んだ後、戸を開ける。

しかし、アスカの姿はない。

手紙を残るくらいなのだから、すでにいないのは明白だったであろうが、キッスは捜さずにはいらなかった。

アスカに何があったのかと考えるキッス。最近のアスカを思い出してみるも、これといって突然いなくなるような事は考えにくい。

一体何があったのだろうか。

キッスは、寝間着から普段着に着替え、出かける準備をし始めた。とても焦っている様子で、準備は着替えと寝癖を整える程度だ。

時計は、ちょうど短針が七を指しており、時間は朝七時をまわったところだ。準備には三分弱という短い時間で済ませていた。

準備が終わり、玄関の扉を開けようとすると、インターホンが鳴った。

キッスは勢いよく扉を開けると共に、アスカ、と発していた。

扉の向こうにいたのは……、ハル〃ジオンだった。

キッスは、まるで今にも死にそうな表情を隠しきれないでいた。そんなキッスを見たハル、話しかけようとするも、キッスは慌て

て飛び出していった。

——どこにいるかも分からない、アスカのもとに。

キスは家を出て、大通りに出た。

木々が道沿いに綺麗に並ぶ道は、まだ朝早いせいか、車もほとんど走っていない。

キスは、携帯電話でアスカに連絡を取ろうとするが、電話は、ただ鳴り響くだけで、アスカの声は聞こえてこなかった。

キスは、道沿いに走り始めた。

十数分後、汗だくとなったキスが足を止める。

一度も止まることなく走り続けたキスは、とある家の前にいた

——アスカの家だ。

アスカは、とあるアパートの一階、一〇二号室を借りていた。

キスは、インターホンを押してみるが、特に反応はなかった。連絡もつかないし、家にもいない。

キスはダメ元でこっそり扉を開けてみると、ゆっくりと開いた……。

彼女でもない女の家に忍び入るキス。幸い、アスカは一人暮らしなので、いきなり親が現れるといったドッキリはない。

部屋に入ったキスだが、電気はついておらず、誰もいる気配はなかった。が、部屋にある一台のノートパソコンが開いたままとなっているのに気づく。

時間が経ちすぎているためか、スリープ状態となっているが、キスはすぐに解除をした。

パソコンの電源がつくと、スリープ状態となる前の画面がそのまま表示される。

画面には、とあるメールが開かれていた。

キスがメールを見てみると、とある人との待ち合わせと思われ

る場所が書かれていた。

『明日、朝七時に軽井ビル屋上で待つ』

軽井ビルは、アスカの家から五分程度の距離にある。

キッスは携帯電話で時間を確認した後、軽井ビルに向かう。アスカの家まで走ってきたキッスにとって、体力的にも限界に近い状態だった。体格からしてみても、とても体力がある方とは思えない細身。

それでも、立ち止まるわけには行かなかった。アスカの事が心配――その一心で。

額から零れ落ちる汗を腕で拭いながら、キッスは軽井ビルまで辿り着いた。

軽井ビルは五階建て。キッスは、ビルの側面から屋上までのびている階段を上り、屋上を目指した。

走った後に階段を上るのは非常に辛いものがあるだろうが、キッスはひたすら上る。

時刻は七時四十分頃、キッスは屋上に辿り着いた。

屋上には、見慣れた二人がいた。それは、捜していたアスカと――。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6118q/>

Fedel Eye's

2011年5月19日07時18分発行